

## DV サバイバーのコントロール感に対するトラウマの大きさの影響

石井 宏祐<sup>1</sup>, 石井 佳世<sup>2</sup>

The Effect of Trauma Severity on DV Survivors' Sense of Control.

Kosuke ISHII, Kayo ISHII

### 要 旨

本研究では、コントロール感の構成要素である「適応的コントロール」と「強迫的コントロール」と「コントロールのゆだね」の間の影響過程をまず明らかにし、加害者から暴力というコントロールを受け続けたDVサバイバーのコントロール感に着目し、トラウマ症状の程度によって、影響過程が異なるのかについて、探索的に検討した。

研究Ⅰでは、コントロールのゆだねから強迫的コントロールへのパスを引き、さらにコントロールのゆだねから適応的コントロールへのパスを加えた因果モデルを作成し、質問紙調査で得られたデータを用い、共分散構造分析を行った。

さらに研究Ⅱで、研究Ⅰで採択されたモデルに対し、DVサバイバーの研究対象者をトラウマ症状がより強い群とより強くない群に分け、多母集団パス解析を実施して因果モデルの差異を検討した。

その結果、トラウマ症状がより強くないDV被害経験者は、症状がより強いDV被害経験者に比べて、コントロールのゆだねが、適応的コントロールに相対的に強く正の影響を及ぼすことが示唆された。DV被害経験者にとっての回復は、コントロールできないことに投げやりになってとられる過程ではむろんない。コントロールできないことを諦めることが、逆説的にコントロールできることに目を向けることに寄与するような、コントロール感の影響過程が示唆された。

【キーワード】 ドメスティック・バイオレンス、サバイバー、トラウマ、コントロール感

### 問題と目的

#### 1. 嗜癖としての暴力

ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence : 以下 DV) は近年重大な社会問題となっている。DV被害者は心的外傷後ストレス障害 (PTSD) など心理的な問題を抱えやすいことが指摘されており、DV被害者に対する支援は重要である。2020年4月3日付け内閣

<sup>1</sup> 教育学部附属教育実践総合センター

<sup>2</sup> 熊本県立大学文学部

府・厚生労働省連名事務連絡の「新型コロナウイルス感染症への対応に係る DV 被害者に対する適切な支援について」や、2020年4月5日に発出されたアントニオ・グテーレス国連事務総長の声明「女性に対する暴力の防止と救済を COVID-19に向けた国家規模の応急対応のための計画の重要項目とすること」も記憶に新しい。

嗜癖の観点から捉えると、DVの加害者は暴力をやめたくても、自分でその暴力をコントロールすることができないのだと考えられる。松下（2011）が述べているように、そもそも身体的・精神的暴力は「他者を支配（コントロール）する」という意味で、快体験の原点といえるもの、と考えられる。加害者にとっては、暴力が慣れ親しんだ社会的技能ようになっており、歪んでいるといえ、暴力もまた他者となつなるといふ「彼らの無意識のニーズに応じている」（松下、2011）のである。このように、DVの本質はパワーとコントロールであると考えられる。加害者がパワーにより被害者をコントロールしようとする構造がある。多くは男性がパワー（社会的、経済的、肉体的優位性）を用いて女性をコントロールしようとする関係がみられる。伊藤（2006）は、加害者の心理的特徴として被害者へのコントロール欲求の強さを挙げている。それでは、硬直した関係により、コントロールを受け続けた被害者のコントロール感にはどのような特徴がみられるのであろうか。

## 2. コントロール感の4側面

石井・石井（2016）はコントロール感について、従来検討されてきた「自分が変化を起こすことができるという感覚」や「自己を状況にあわせようという感覚」に加え、「変化に強迫的にとらわれる感覚」や「変化をゆだねる感覚」の総体として定義した。そして、コントロール感に関する探索的因子分析の結果から、コントロール感が「完全主義傾向」「効率性」「個を超えるものの受容」「自己抑制」の4つの因子からなることを明らかにした。「自分が変化を起こすことができるという感覚」は、コントロールの利点を享受できる感覚を示す「効率性」として、「自己を状況にあわせようという感覚」は、より良い選択に向けて自分自身を抑えることができる感覚を示す「自己抑制」として、「変化に強迫的にとらわれる感覚」は、嗜癖的で強迫的なコントロール感に関する「完全主義傾向」として、そして「変化をゆだねる感覚」は、自己が対象をコントロールするのだと力まず、より謙虚にコントロールに向き合うことができる脱嗜癖的感觉を示す「個を超えるものの受容」として、捉えることができる、としている。さらに「『個を超えるものの受容』は、コントロールをどのように捉えるかといった、メタ認知的コントロール感である」とされ、「他の『完全主義傾向』『効率性』『自己抑制』と論理階型を異にしている」ことも示唆されている。

「効率性」と「自己抑制」は、目的に向かい的確に自己の言動を調整するコントロールや、状況に即して自らに我慢を強いるようなコントロールを示している。必ずしも常に望ましいコントロールというわけではないが、適応的なコントロール感のあらわれであるといえるだろう。

「完全主義傾向」は、コントロールの実現可能性や TPO などにコントロール感を適応させていくというよりも、無理なコントロールにとらわれてしまうおそれを示していると考えられる。強迫的なコントロール感のあらわれであるといえよう。

また、「個を超えるものの受容」は、自分自身を状況に適応的に合わせていくわけでも、自分自身のコントロール感にとられるわけでもなく、自分という個を超えたところで、物事が進むことがありうることを受け止めているといった、コントロールをゆだねる感覚のあらわれであるといえよう。

### 3. 本研究の目的

そこで本研究では、以上の3つの想定される潜在変数、すなわち「適応的コントロール」と「強迫的コントロール」と「コントロールのゆだね」の間の影響過程をまず明らかにする(研究Ⅰ)。

加えて、加害者から暴力というコントロールを受け続けた DV サバイバーの影響をトラウマ症状の程度として捉え、トラウマ症状の程度によって、被害者のコントロール感の影響過程が異なるのかについて、探索的に検討することを目的とする(研究Ⅱ)。

### 4. 仮説モデルの生成

コントロールのゆだねは、強迫的コントロールと適応的コントロールにそれぞれ正の影響を及ぼすと考えられる。

まず、強迫的コントロールは、無理なコントロールにとらわれているという点で、メタレベルではコントロールを失っているといえる。コントロールしようと無理にとらわれている状態をコントロールできないのであり、コントロール喪失の事態にパラドキシカルに陥っているといえる。このような状況では、強迫的なコントロールの効果は期待できず、効果を期待するために個を超えた存在の想定が必要とされる場合もあるだろう。例えばギャンブル嗜癖者が、運を天にまかせて有り金をすべて賭けてしまう(田辺, 2002)ということがよくあるように、コントロールをゆだねることで、強迫的なコントロールにより一層没入することは散見される。そのため、コントロールのゆだねは、強迫的コントロールに正の影響を及ぼすと考えられる。

また、適応的コントロールは、目的に向かい的確に自己の言動を調整しようとするコントロールや、状況に即して自らを抑えるコントロールであるが、これらは、自己の力を過信してしまうと強迫的コントロールに陥ってしまう。自己の言動を調整したり抑えたりする際は、コントロールすることにこだわりすぎず、環境を受け入れ、コントロールできないものを拒絶しない柔軟さが求められる。例えば Alcoholics Anonymous (1939) では、アルコール嗜癖者に問題飲酒のコントロールを神にゆだねて、自分にできることをしていくよう勧め、現在まで多くのアルコール嗜癖者の大きな支えになってきた。そのため、コントロールのゆだ

ねは適応的コントロールにも正の影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究では、コントロールのゆだねから、強迫的コントロールへのパスを引き、さらにコントロールのゆだねから適応的コントロールへのパスを加えた因果モデルを作成した(図1)。

研究Iでは、この仮説モデルに対して共分散構造分析を用いて分析する。

さらに研究IIで、トラウマ症状がより強い群とより強くない群に分け、多母集団パス解析を実施した。

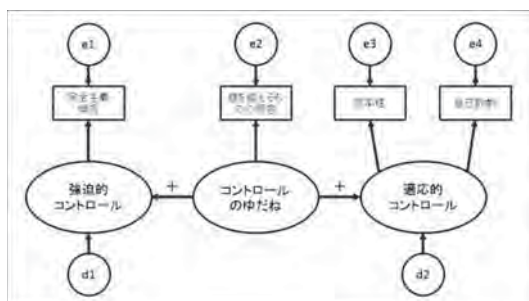


図1 仮説モデル

## 研究I

### 方法

- (1) 調査対象者 322名(男性46名、女性276名)、平均年齢25.99歳( $SD=10.12$ )。内訳はA市男女共同参画センター賛助団体参加者82名、B市子育て支援施設利用者33名、C県大学生207名。回答は無記名であった。
- (2) 調査時期 2012年1月
- (3) 調査方法 個別自記入式。回答依頼時に文書と口頭にて説明合意を得た。
- (4) 質問紙の構成

1) フェイスシート 性別、年齢の記入を求めた。

2) コントロール感尺度 コントロール感を測定するため、石井・石井(2016)で公開された22項目5件法(「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」)のコントロール感尺度(表1)を用いた。

表1 コントロール感尺度

<b>完全主義傾向</b>
完璧にできなければ、成功とはいわない。 少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である。 やるべきことは完璧にやらなければならない。 人前で失敗することなど、とんでもないことだ。 ものは常にうまくできていないと気がすまない。 注意深くやった仕事でも、欠点があるような気がして心配になる。 何かをやり残しているようで、不安になることがある。
<b>効率性</b>
計画的に行動する。 仕事は手順・段取りを考えて、効率よく進めようとする。 目先のことよりも、長期的な損得を考えて行動する。 その時どきの目的や状況に応じて、無理のない計画を立てる。 重要な選択をする時は、プラス面・マイナス面を考えて、現実的に判断する。 わずかな空き時間・待ち時間も、有効に活用する。
<b>個を超えるものの受容</b>
運やめぐりあわせを考える。 伝統や文化を大切だと思ふ。 ものごとを運命だと受け入れる。 自然や宇宙の偉大さの前に、謙虚な気持ちでありたいと思ふ。 常識やしきたりを重んじる。 長幼の序は大切だと思ふ。
<b>自己抑制</b>
儉約する。 自分のほしいものなどががまんできる。 思い通りにならないことがあってもがまんすることができる。

結果

(1) 変数の要約 コントロール感尺度22項目の各回答について、「あてはまる」を5点、「どちらかというにあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというにあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点として得点化した。

石井・石井（2016）による4因子モデル（表1）を適用し、4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し下位尺度得点とした。

各変数の記述統計量と変数間相関を表2に示す。

また各変数のα係数は、完全主義傾向.83、効率性.77、個を超えるものの受容.76、自己抑制.71であった。よって内的整合性は許容できる範囲であった。

表2 各変数の記述統計量と相関係数

	記述統計量			相関係数			
	N	M	SD	完全主義傾向	効率性	個を超えるものの受容	自己抑制
完全主義傾向	317	3.04	.80	—			
効率性	319	3.37	.71	.07	—		
個を超えるものの受容	312	3.60	.71	.12*	.25***	—	
自己抑制	319	3.57	.83	.04	.44***	.20***	—

注) \*:p<.05, \*\*:p<.01, \*\*\*:p<.001

(2) 仮説モデルの検討 仮説モデルに対して共分散構造分析を行った結果、図2に示すように、5%水準ですべて有意な推定値（標準化推定値）が得られた。

適合度指標はGFI=.999、AGFI=.997、CFI=1.000、RMSEA=.000と高い適合を示した。

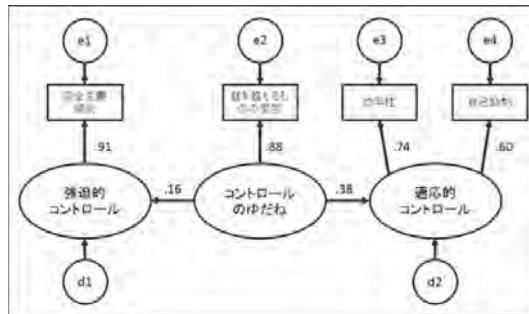


図2 仮説モデルと分析結果（数値は標準化推定値）

## 考 察

石井・石井（2016）は、探索的因子分析の結果から、コントロール感が「完全主義傾向」「効率性」「個を超えるものの受容」「自己抑制」の4つの因子から構成されることを示唆し、さらに「個を超えるものの受容」が、「完全主義傾向」や「効率性」や「自己抑制」とは論理階型を異にする可能性についても言及した。

そこで本研究では、まず個を超えるものの受容に影響を及ぼす潜在変数「コントロールのゆだね」と、完全主義傾向に影響を及ぼす潜在変数「強迫的コントロール」、効率性と自己抑制に影響を及ぼす潜在変数「適応的コントロール」の3変数を想定した。そして「コントロールのゆだね」がメタ・コントロールとして「強迫的コントロール」と「適応的コントロール」に影響を及ぼすとするモデルを作成し、共分散構造分析によって因果過程を検証した。

その結果、コントロールのゆだねから適応的コントロールへの係数が.38であったことから、コントロールのゆだねが、適応的コントロールに正の影響を及ぼすことが示唆された。また、コントロールのゆだねから強迫的コントロールへの係数が.16であったことから、適応的コントロールへの影響ほどではないにしても、コントロールのゆだねが、強迫的コントロールに正の影響を及ぼすことが示唆された。

## 研究Ⅱ

### 方 法

研究Ⅰによって明らかにされた、コントロールのゆだねが、適応的コントロールと強迫的コントロールに正の影響を及ぼすという因果モデルについて、トラウマ症状がより強い群とより強くない群に分け、多母集団パス解析を実施する。

- (1) 調査対象者 DV 被害を受けた経験を持ち、現在は被害を受けていない女性84名。平均年齢は38.81歳（20歳～70歳、標準偏差10.85）であった。
- (2) 調査時期 2012年2月
- (3) 調査方法 個別自記入形式の質問紙調査で実施された。D県、E県、F県の母子生活支援施設、DV 被害者自助グループに質問紙を郵送し、個別配付個別回収形式で行われた。回

答依頼時に文書にて説明合意を得た。

(4) 倫理的配慮 研究への協力依頼はD県、E県、F県の母子生活支援施設、DV 被害者自助グループを通して行い、現在はDV 被害を受けていない者に限定して行った。各機関には、研究内容、実施期間、所要時間、調査への協力は任意で無記名で行われること、内容をそのまま研究結果として公表することを避けることなどプライバシー保護のための工夫、質問紙の管理方法を記載した研究協力依頼書を送付し、同意が得られた対象者のみに質問紙への回答を依頼した。

さらに質問紙の表紙には、質問紙の回答は質問項目を見た上で判断できること、回答を途中で中止することができること、データは厳重に管理され本研究以外の目的には使用しないこと、回答内容は統計的に処理され個人が特定される事はないこと、研究結果は他の調査対象者の個人情報にかかわる部分を除いては開示が可能なこと、研究の成果は学会や学術雑誌およびデータベース等で公表されることがあるが、その際には個人が特定出来ないように処理をした上で発表することを記載し、同意が得られた場合のみ質問紙に回答を求めた。

#### (5) 質問紙の構成

1) フェイスシート 性別、年齢、職業、被害を受けていた期間、被害を受けていた当時の年齢、家族構成、DV 被害の種類、加害者との当時及び現在の関係について記入を求めた。

2) コントロール感尺度 コントロール感を測定するため、石井・石井（2016）で公開された22項目5件法（「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」）のコントロール感尺度（表1）を用いた。

3) 改訂出来事インパクト尺度 被害の現在への影響をトラウマ症状の程度で測るため、飛鳥井（1999）によって作成された改訂出来事インパクト尺度（22項目）を採用した（表3）。

「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかという

表3 改訂出来事インパクト尺度

1	どんなきっかけでも、そのことを思い出すと、そのときの気持ちが入りかえしてくる。
2	睡眠の途中で目がさめてしまう。
3	別のことをしていても、そのことが頭から離れない。
4	イライラして、怒りっぽくなっている。
5	そのことについて考えたり思い出したりするときは、なんとか気を落ち着かせるようにしている。
6	考えるつもりはないのに、そのことを考えてしまうことがある。
7	そのことは、実際には起きなかったとか、現実のことではなかったような気がする。
8	そのことを思い出させるものには近寄らない。
9	そのときの場面が、いきなり頭に浮かんでくる。
10	神経が敏感になっていて、ちょっとしたことでどきどきしてしまう。
11	そのことは考えないようにしている。
12	そのことについては、まだいろいろな気持ちがあるが、それには触れないようにしている。
13	そのことについての感情は、マヒしたようである。
14	気がつく、まるでそのときにもどってしまったかのように、ふるまったり感じたりすることがある。
15	寝つきが悪い。
16	そのことについて、感情が強くなりあげてくることがある。
17	そのことをなんとか忘れようとしている。
18	ものごとく集中できない。
19	そのことを思い出すと、身体が反応して、汗ばんだり、息苦しくなったり、むかむかしたり、どきどきしたりすることがある。
20	そのことについての夢を見る。
21	警戒して用心深くしている気がする。
22	そのことについては話さないようにしている。

とあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

## 結果

(1) 変数の要約 コントロール感尺度22項目について、4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し下位尺度得点とした。記述統計量と変数間相関を表4に示す。また、各変数の $\alpha$ 係数は、完全主義傾向.88、効率性.81、個を超えるものの受容.86、自己抑制.75であった。よって、一定の内的整合性が確認された。

また、改訂出来事インパクト尺度22項目に対して $\alpha$ 係数を算出したところ $\alpha=.93$ であり、十分な信頼性が確認された。なお、記述統計量は、 $N=78$ 、 $M=72.58$ 、 $SD=20.01$ 、 $Min=23$ 、 $Max=102$ であった。

表4 各変数の記述統計量と相関係数

	記述統計量			相関係数			
	N	M	SD	完全主義傾向	効率性	個を超えるものの受容	自己抑制
完全主義傾向	81	2.93	.98	—			
効率性	80	3.59	.80	.08	—		
個を超えるものの受容	75	3.55	.91	.17	.48***	—	
自己抑制	81	4.02	.86	.07	.52***	.41***	—

注) \*: $p<.05$ , \*\*: $p<.01$ , \*\*\*: $p<.001$

## (2) 多母集団パス解析

1) モデルの構成 パス解析モデルは研究Iによって支持されたモデルを採択する(図1再掲)。

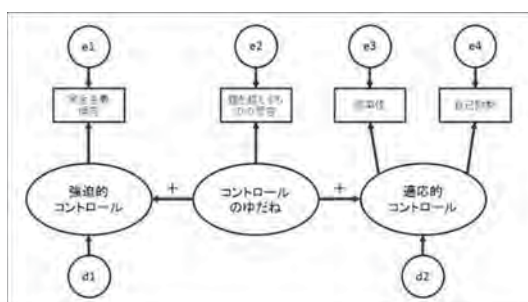


図1 採択モデル(仮説モデルからタイトル変更)(再掲)

2) 集団ごとの分析 ト라우マ症状の程度によって調査対象者が2群に分けられた。改訂出来事インパクト尺度得点が平均値より低い群をトラウマ症状低群、平均値より高い群をトラウマ症状高群とした。

まず、トラウマ症状低群について、パス解析モデルに対して共分散構造分析を行った結果、



適合度指標は GFI = .991、AGFI = .957、CFI = 1.000、RMSEA = .000 であり、モデルの適合が良好であることが示された。

次に、トラウマ症状高群について、共分散構造分析を行った結果、適合度指標は GFI = .994、AGFI = .970、CFI = 1.000、RMSEA = .000 であり、この場合もモデルの適合が極めて良好であることが示された。

3) 配置不変性の検討 各集団でパス解析モデルの適合が確認されたため、モデルの配置不変性を検討した。2つの集団について、パス解析モデルに対して、多母集団同時分析を行った結果、適合度指標が GFI = .993、AGFI = .965、CFI = 1.000、RMSEA = .000 であり、モデルの適合が極めて良好であることが示された。

この結果から、パス解析モデルは、両母集団に共通して適合がよく、配置不変が成り立つ可能性が高いと考えられた。

4) 集団間での差異の検討 配置不変性が確認されたため、モデルの各推定値に関する集団間での差異を検討するため、パラメータの対比較を行った。その結果、コントロールのゆだねから適応的コントロールへのパスについて、トラウマ症状低群のほうがトラウマ症状高群に比べて5%水準で有意に推定値が高かった。

5) 等値制約 モデルの部分的な評価を含め、モデル全体における適合に言及するため、異質性が疑われるパラメータ、すなわちコントロールのゆだねから適応的コントロールへのパスに集団間で等値の制約を置いて多母集団同時分析を行った。その結果、適合度指標は GFI = .958、AGFI = .833、CFI = .980、RMSEA = .051 であり、モデルの適合は許容できる程度であった。

6) 最終モデルの採択 等値制約なしモデル及び等値制約ありモデルについて検討した結果、適合度指標(表5)によって、等値制約なしモデルのほうが等値制約ありモデルに比べて適合が良好であることが示された。

従って、本研究では等値制約なしモデルを最終モデルとして採択した。図3と図4に示す。

これにより、現在トラウマ症状がより強くないDV被害経験者は、より強いDV被害経験者に比べて、コントロールのゆだねによる適応的コントロールへの影響が相対的に大きいことが示唆された。

表5 等値制約なしモデル及び等値制約ありモデルの適合度指標(抜粋)

モデル名	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
等値制約なしモデル	.993	.965	1.000	.000	32.896
等値制約ありモデル	.958	.833	.980	.051	35.835

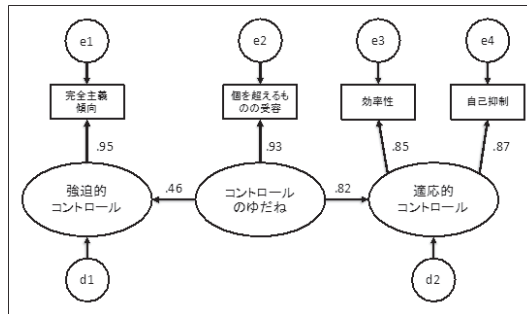


図3 ト라우マ症状低群の分析結果 (数値は標準化推定値)

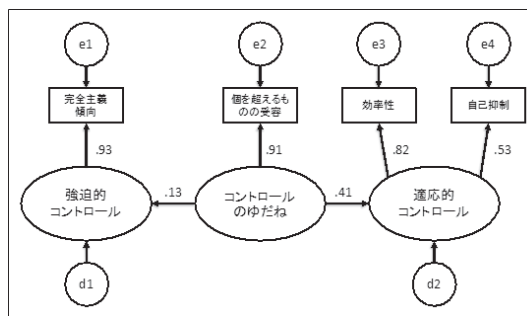


図4 ト라우マ症状高群の分析結果 (数値は標準化推定値)

### 考 察

DV 被害者は加害者の暴力によってコントロール感が奪われ、それと同時に、あるいはその後に至るまで、トラウマ症状というコントロール不能な症状に悩まされることが少なくない。DV 被害経験者は長い間コントロール感が損なわれた状態におかれるのだと考えられる。そこで本研究では、DV 被害体験の影響をトラウマ症状で測定し、トラウマ症状の程度によって、DV 被害経験者のコントロール感の影響過程がいかに異なるのかについて、探索的に明らかにした。

本研究の結果から、コントロールのゆだねから適応的コントロールへの係数が、トラウマ症状低群で.82、高群で.41であり、両者に有意差が認められることから、トラウマ症状低群のほうが高群と比べて、コントロールのゆだね向上が、適応的コントロールに相対的に強く正の影響を及ぼすことが示された。

また、トラウマ症状低群においては、コントロールのゆだねが、強迫的コントロールよりも、適応的コントロールに非常に強く影響を及ぼすことが示唆された。

しかしながら、トラウマ症状のもともとの多寡や、回復に伴う減少なのかについては今回、把握ができていない。今後はこの点をふまえ、より精練された知見を得ることが課題として挙げられよう。

## 総合考察

本研究の意義はまず、コントロールのゆだねが、社会的に望ましいと捉えられるであろう適応的コントロールに正の影響を及ぼすことを実証的に明らかにした点にある。コントロールをゆだねるとは、コントロールを諦め、コントロールしなくなるということではなく、有益なコントロールを行うことにつながっていくことが示唆された。コントロールをゆだねることで、無理のないコントロールに取り組む態度が整うというパラドキシカルな影響過程が示唆されたといえよう。

また、コントロールのゆだねが社会的には望ましくないと捉えられるであろう強迫的コントロールにも正の影響を及ぼしていることを明らかにしたことも本研究の意義として挙げられよう。一方の適応的コントロールに正の影響であるため、もう一方の強迫的コントロールには負の影響、ということではなく、両者に対し正の影響を及ぼしていた。

従来、嗜癖臨床において重要な貢献を果たしてきた Alcoholics Anonymous (1939) では、「意志と生き方を自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした」というステップが12ステップの3番目に位置づけられている。このように、コントロールをゆだねることは、重視されてきた。

しかしながら、臨床場面に目を向けると、強運を天にゆだねてパチンコに足繁く通うギャンブル嗜癖者など、コントロールをゆだねることが必ずしも望ましい方向に向かうわけではないことは散見される事実である。

本研究では、コントロールをゆだねることのメタ・コントロールとしての性質に着目したことで、臨床場面に即したコントロールの影響過程を明らかにすることができたといえよう。

さらに、DV被害経験者を嗜癖による被害者と明確に位置づけた点も、本研究の意義として挙げられよう。DV加害者の暴力は、嗜癖行動として捉えられる。嗜癖による被害には様々なものがあり、DV被害体験をすべてそのまま嗜癖による被害経験とすることはできないが、親密な他者の嗜癖行動に直接的にさらされ続けるという経験がその後のコントロール感にどのような影響を及ぼすのかという問いに、本研究の問題意識は部分的に翻案することが可能であると考えられる。

また、トラウマ症状がより強くないDV被害経験者は、症状がより強いDV被害経験者に比べて、コントロールのゆだねが、適応的コントロールに相対的に強く正の影響を及ぼすことが示唆された点も、本研究の大きな意義である。ともすれば強迫的コントロールにも正の影響を及ぼすコントロールのゆだねが、トラウマ症状が少ないことによって適応的コントロールに強く正の影響を及ぼすことが明らかになった。DV被害経験者にとっての回復は、コントロールできないことに投げやりになってとられる過程ではむろんない。コントロールできないことを諦めることが、コントロールできることに目を向けることに寄与するような、コントロール感の影響過程が考えられる。

## 文献

- Alcoholics Anonymous (1939). Alcoholics Anonymous. Alcoholics Anonymous World Services, Inc.  
AA 日本出版局 (1979). アルコホーリクス・アノニマス—無名のアルコホーリクたち. AA 日本ゼネラルサービス.
- 飛鳥井望 (1999) 不安障害—外傷後ストレス障害 (PTSD). 臨床精神医学増刊号, 28, 171-177.
- 男女共同参画局 (2020). 「新型コロナウイルス感染症への対応に係る DV 被害者に対する適切な支援について」(令和 2 年 4 月 3 日付け内閣府・厚生労働省連名事務連絡). Retrieved from [https://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/pdf/20200410\\_1.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/pdf/20200410_1.pdf) (January 1, 2021)
- 男女共同参画局 (2020). アントニオ・グテーレス国連事務総長の声明「女性に対する暴力の防止と救済を COVID-19 に向けた国家規模の応急対応のための計画の重要項目とすること」(令和 2 年 4 月 5 日). Retrieved from [https://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/pdf/20200410\\_4.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/pdf/20200410_4.pdf) (January 1, 2021)
- 石井宏祐・石井佳世 (2016) コントロール感尺度の作成. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 11, 3-15.
- 伊藤直文 (2006). 緊張と歪みからの回復—〈暴力〉のメカニズムと克服の道. 村瀬嘉代子 (監修) 家族の変容とこころ. 新曜社.
- 松下年子 (2011). アディクションと依存症. 松下年子・日下修一 (編著) アディクション看護学. メヂカルフレンド社.
- 田辺等 (2002) ギャンブル依存症. NHK 出版.

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP19K03321、JP17K04479 の助成を受けたものです。